

台湾は日本の植民地統治(1895-1945)を経て1980年代まで国民党独裁統治を体験した。また台湾のエスニック・グループは、いわゆる「本省人」(日本統治期に台湾住民であった者及びその子孫)と「外省人」(戦後入台の大陸出身者及びその子孫)、そして遥か以前からの住民である先住民から構成され、本省人は福建系と客家系とに分かれる。このように複雑な状況下での台湾アイデンティティ形成に対し、文学が果たした役割は大きい。

鄭清文(チョン・チンウエン、ていせいぶん、1932-)は日本語国語体制下で小学校教育を終え、北京語国語体制下で中等教育から大学教育を受け、銀行勤務のかたわら作家活動を行った戦後第二世代作家で、農村と都市の様々な人生を描いている。本論文は日本統治期に少年期を過ごし、戦後に中国語を身に付けた本省人エリートの鄭清文が、外省人が独占していた台湾文壇において活躍の場を広げながら、台湾アイデンティティを形成していく過程を考察するものである。

第一章は鄭の生い立ちと、彼が文壇にデビューして以後の初期作品(1958-1974)の流れについて論じる。第二章は民主化運動の原点の一つである美麗島事件勃発の年、1979年発表作の「我要再回來唱歌」を中心に、鄭文学における台湾アイデンティティ・テーマの登場過程を分析し、同作における国民党政権への批判を考察する。同作は99年に台湾の高校国語教科書に採用されており、第三章は教科書における台湾文学の受容とそれに伴う台湾アイデンティティの変容について検討し、第四章は短編小説「三脚馬」(1979)「髮」(1989)等を中心に、鄭文学における日本統治期の記憶を検証し、それが鄭文学におけるアイデンティティ形成に与えた影響について論じる。

第五章は1990-2001年発表の長編小説で70年代の在米留学生を主人公とする『サンフランシスコ——一九七二』をめぐり、彼女が父やボーイフレンドらの意に反してグリーンカードを取得せず帰台するまでを、スティグマを持つ祖母への愛とカミュ『異邦人』への関心を手掛かりに分析している。第六章は最近台湾での鄭文学に対するノスタルジック的受容に関し、2010年の映画監督・脚本家の呉念真による舞台劇化に注目し、演劇脚本への改編という新テキストへの変容過程とその時代背景を検証する。終章は鄭とその時代をめぐり、台湾アイデンティティ形成の文化的社会的意義を総体的に検討し、その特徴を明らかにし、鄭作品の台湾社会における受容状況について述べる。

本論文は他の旧植民地文学や在米華人文学との比較研究等の課題を残すものの、二つの外来政権を体験した台湾作家のアイデンティティ形成を、スティグマをめぐるヘミングウェイ作品との影響関係、エドワード・サイードのカミュ批判等の援用により鄭文学のポストコロニアル性を明らかにした点、このアイデンティティが国語教科書等により台湾市民に共有されていく過程を解明した点を中心に顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達しているとの結論を得た。